イスラエルの民に求められていた資質とは

――ヤコブの自己変革より――（1）*

島田みくに

序

聖書の記述によると、イスラエルの民の原点は、族長ヤコブ、イサク、アブラハムにある。直接的には、創世記 32 章 22 ― 32 節に記されているように、ヤコブに「イスラエル」という新しい名が与えられたヤボクの渡しでの出来事から始まる。この出来事においてヤコブが至った霊的な体験とは、のちのイスラエルの民とどのような関係があるのだろうか。さらに、イスラエルの民に期待されたあり方は、新約の教会とどのような関係があるのだろうか。

出エジプト記 19 章 3 節が語るように、イスラエルの民はシナイ契約において「ヤコブの家」「イスラエルの子ら」として招かれている。さらに、シナイ山にて律法の諸規定が啓示されたのち、それらに不従順であった場合、民の無割礼の心がへりくだるなら、神は「ヤコブとのわたしの契約を思い起こす」（レビ 26:42）と記されている。ここから、律法の諸規定を通してイスラエルの民に求められている資質が、族長ヤコブの資質と何らかの関連性を有することが想定される。また、イスラエルの民と、新約の教会の関係についても様々な立場があるが、両者には密接な関係があると想

＊本稿は、東京基督教大学大学院神学研究科神学専攻の修士論文（2020 年度）を要約し、またそれに加筆したものである。本論文の作成にあたり、指導教官である木内伸嘉先生から貴重な助言をいただいた。ここに心から感謝したい。ただし、ここに提示された意見がすべて筆者の責任であることは言うまでもない。

定することができるのではないだろうか。

しかしこれまで、ヤボクの渡しの出来事におけるヤコブの変化や、旧約のイスラエルの民の評価、ヤコブとイスラエルの民や、新約の教会との関連性について、霊的側面からは十分に論じられてこなかったと思われる。それゆえ本研究では、ヤコブの至った霊的な変革は、イスラエルの民にも求められており、また新約の教会にも求められているという仮説に立ち研究を進める。すなわち、ヤコブの自己変革との比較において、律法を通してイスラエルの民に求められていた資質が何であったかについて結論づけることにより、新約の教会に神が期待されている資質を導き出すことを目的とする。

この仮説は、ヤコブの生涯を描く創世記 25 章 20 節から 50 章と、イスラエルの民に与えられた律法の諸規定を記している、出エジプト記とレビ記より立証することができると考えられる。出エジプト記で聖所が完成したのち、レビ記では、聖所における活動に焦点を当てた規定が展開され、シナイ山にて啓示された諸規定として 27 章で区切られている（レビ 27:34）。そのため創世記、出エジプト記、レビ記までを議論の中心とする。研究方法としては、五書の編集という可能性を認めるが、今あるテキストを順序通り読み進める手法を用いる。

以上の仮説を立証すべく、以下の順序に従って論考を深めていく。

第 1 章では、ヤコブの変革とは何であったかを考察する。とりわけ創世記 32 章 22 ― 32 節の格闘における、名前の変更以上の霊的資質の変革に注目する。創世記 25 章 20 節から 49 章におけるヤコブの生涯の歩みや、創世記 33 章以降の「ヤコブ」と「イスラエル」の名前の使い分けに注目しつつ、ヤボクの渡しの出来事がもたらしたヤコブの資質の変化を導き出す。

第 2 章では、シナイ契約と律法において神がイスラエルの民に期待した霊的資質を考察する。具体的には、「ヤコブの家」、「イスラエルの子ら」に対して呼びかけられた、シナイ契約の要旨とも言える出エジプト記 19 章 5 ― 6 節の釈義を中心に、律法の目的について考察する。特に「わたしの宝」「祭司の王国」「聖なる国民」について、どのような状態を指すのか、

どの時点でイスラエルの民がそれらの立場になるのかを考察する。このシナイ契約においてイスラエルの民に求められたことは、律法への従順を通して達成される「聖」の状態であると想定できる。

そこで第3章では、シナイ山にて与えられた律法の諸規定である、出エジプト記20章からレビ記27章の諸規定において展開され、民に求められている「聖」の概念を考察する。

その上で、第4章では、イスラエルの民に求められていた資質が、ヤコブの資質とどのような関連性があるのか、またその資質はどのように獲得することができるのかを明らかにする。

なお、本稿では「霊的」という言葉を使用する際、神の前での個々人の心のあり方を指す言葉として用いている。イスラエルの民に求められた資質を考察するにあたり、共同体の基礎となる個人のあり方は見逃されてはならないからである。

また、特に断りのない限り、ヘブライ語聖書の引用はBHSを、日本語聖書の引用は新日本聖書刊行会訳の新改訳2017を使用する。

第1章　ヤコブにとってのヤボクの渡しの出来事（創32：22－32）

第1章では、まず、創世記32章22－32節におけるヤボクの渡しの出来事より、ヤコブにどのような霊的変化が起きたのかを考察する。その上で、創世記25章20節から49章に見られるヤコブの性質を考察し、ヤボクの渡しの出来事が彼の生涯にもたらした変化を明らかにする。また、創世記33章以降の「ヤコブ」と「イスラエル」の名前の使い分けに注目することで、ヤボクの渡しの出来事以降の彼がどのように描かれているのかを探る。

1.1.　ヤボクの渡しの出来事におけるヤコブの変化

ヤコブは、兄エサウから長子の権利と祝福を奪ったことを契機に（25-27章）、カナンの地を出て、ハランに住む叔父ラバンのもとで暮らしていた。ヤコブはラバンの下で働くことで、妻と子どもたち、豊かな財産を得た（29-30章）。その後、神の命令（31:3）によってカナンの地を目指す。その旅の途上において、ヤボクの渡しの出来事は起こった。
32章でヤコブはまず、マハナイムにて神の使いの軍勢と出会う（1,2節）。ヤコブはその後、再会しなければならないエサウのことで非常に恐れを抱き、宿営を分け（7-8節）、神に祈り（9-12節）、贈り物を用意する（13-21節）。さらに妻や子どもたちにヤボクの渡し場を渡らせた後、一人、後に残る（22-23節）。このとき「ある人」との格闘が始まる。ヤコブは、ももの関節を打たれながらも祝福を求め、ついには新しい名前とともに祝福を与えられるという不思議な体験をする（24-30節）。以下にこの格闘の意味と、ヤコブが受けた祝福の性格について考察する。

【創世記32章22 － 32節】
[22] その夜、彼は起き上がり、二人の妻と二人の女奴隷、そして十一人の子どもたちを連れ出し、ヤボクの渡し場を渡った。[23] 彼らを連れ出して川を渡らせ、また自分の所有するものも渡らせた。[24] ヤコブが一人だけ後に残ると、ある人が夜明けまで彼と格闘した。[25] その人はヤコブに勝てないのを見てとって、彼のももの関節を打った。ヤコブのももの関節は、その人と格闘しているうちに外れた。[26] すると、その人は言った。「わたしを去らせよ。夜が明けるから。」ヤコブは言った。「私はあなたを去らせません。私を祝福してくださらなければ。」[27] その人は言った。「あなたの名は何というのか。」彼は言った。「ヤコブです。」[28] その人は言った。「あなたの名は、もうヤコブとは呼ばれない。イスラエルだ。あなたが神と、また人と戦って、勝ったからだ。」[29] ヤ

コブは願って言った。「どうか、あなたの名を教えてください。」すると、その人は「いったい、なぜ、わたしの名を尋ねるのか」と言って、その場で彼を祝福した。[30] そこでヤコブは、その場所の名をペヌエルと呼んだ。「私は顔と顔を合わせて神を見たのに、私のいのちは救われた」という意味である。[31] 彼がペヌエルを通り過ぎたころ、太陽は彼の上に昇ったが、彼はそのもものために足を引きずっていた。[32] こういうわけで、イスラエルの人々は今日まで、ももの関節の上の、腰の筋を食べない。ヤコブが、ももの関節、腰の筋を打たれたからである。

1.1.1. 格闘の意味とは

注解者の多くは、ヤボクの渡しの出来事を、ヤコブの人生における最大の転機として重要視している。(1)

まず、ヤコブと格闘した「ある人」(24 節)とは誰であったか。Sarna は、ミドラシュを根拠に、ヤコブが約束の地に入ることを妨害するエサウの守護神であると解釈する。(2) Rigsby は、ホセア書 12 章 5 節から、神の「御使い」であると説明する。(3) しかしキドナーは、旧約聖書で神が人として姿を現されるとき、多くの場合「主の使い」と呼ばれ、この名称は「神」あるいは「主」と取り替えることができるという。(4) 格闘を経て、「ある人」が自らを אֱלֹהִים「神」(28 節)と言い、ヤコブも「神」(30 節)と認識したこ

(1) 舟喜 信「創世記」『新聖書注解 旧約 1』いのちのことば社、1980 年、218 頁 ; C. F. Keil and F. Delitzsch, *Biblical Commentary on the Old Testament*, Translated by James Martin (Peabody: Hendrickson Publishers, 1996), Accordance electronic ed., paragraph 455; Gordon J. Wenham, *Genesis 16-50*, Word Biblical Commentary vol. 2 (Waco: Zondervan, 1994), 296.

(2) Nahum. M. Sarna, *Genesis*, The JPS Torah Commentary, The Jewish Publication Society (Philadelphia: The Jewish Publication Society, 1989), 404.

(3) R. O. Rigsby, 'Jacob,' in *Dictionary of the Old Testament: Pentateuch*., ed. Bill T. Arnold and H. G. M. Williamson (Downers Grove: IVP Academic, 2005), 465.

(4) デレク・キドナー、遠藤嘉信・鈴木英昭共訳『ティンデル聖書注解 創世記』いのちのことば社、2008 年、213 頁

とからも、ヤコブと格闘した「ある人」とは神的な存在であったと言える。たとえ御使いであったとしても、御使いを遣わした神と不可分の存在だと言える。そのため、「ある人」を「神」と言い換えることができる。
この格闘は、「ある人が……格闘した」（24 節）とあるように、神から始めたものである。

1.1.1.1.　神の敵対者としてのヤコブ

では、神がヤコブに仕掛けたこの格闘の意図とは何であったのか。テキストには明確に記されていないが、格闘の結果、ヤコブは勝利したが、彼のももの関節は外されている（25 節）。またヤコブは自らの名前を告白するとともに、「イスラエル」という新しい名前と、祝福が与えられている（27-29 節）。

この格闘の解釈について、Keil、フォン・ラート、Wenham は、直前のマハナイムでの祈り（32:9-12）に対する答えとして理解する[(5)]。また Speiser は、ヤコブに対する信仰の試練として解釈する[(6)]。しかしこれら二通りの解釈は、神がヤコブをエサウから救い出すのではなく、ヤコブの命を脅かす戦いを始められたことについて、十分に説明していないと言える。それゆえ、さらに踏み込んで、敵対者としての神を捉える必要がある。Calvin は、信仰の試練として捉えつつ、神を敵対者としても捉える。逆境は、信仰と忍耐の試練か、罪の矯正のためであり、そのために信仰者は人生の全過程を通して戦わなければならないという[(7)]。キドナーは、ヤコブがそれまで力を競っていたのは実は、エサウやラバンではなく、神であったことを指摘する[(8)]。渡辺は、神がヤコブに襲い掛かった時、ヤコブは神の怒りこそ真に

（5）Keil, *BCOT*, Accordance, paragraph 455; ゲルハルト・フォン・ラート、山我哲雄訳『ATD 旧約聖書註解 創世記 下』ATD・NTD 聖書註解刊行会、1993 年、587 頁；Wenham, *Genesis 16-50*, 297.

（6）E. A. Speiser, *Genesis*, Anchor Bible [New York: Doubleday & Company, Inc., 1964], 256-57.

（7）John Calvin, *A Commentary on Genesis*, A Geneva Series Commentary, trans. and ed. John King (Edinburgh: The Banner of Truth Trust, 1965), 194.

恐れるべきであることを悟ったという[9]。

このように、神がヤコブに敵対していたと見るなら、神が打ち負かそうとしたヤコブの性質とは何かを問う必要がある。これについてテキストから明確に読み取ることはできないが、注解者たちはヤコブの内面的な罪の性質を指摘している。Keil は、ヤコブが神に勝つためには、肉欲的な性質が砕かれ、兄を欺いた罪意識から解放される必要があったと述べる[10]。フォン・ラートは、この出来事が、長子の祝福における欺きの物語と関連しているため、神の前で未解決のままでは済まされないものとして取り上げられていると考える[11]。マイアーは、神がヤコブの内から自我や自己依存心といった、真実のいのちを妨げる一切のものを取り除こうとしていたと考える[12]。坂野は、ヤコブの自我を打ち砕くための格闘であると解釈する。ヤコブはエサウの怒りに対して自分の作戦で対処しようとしており、彼の心は、自分の知恵・力・財産に頼る自我が中心を占めていたという[13]。このように一部の注解者は、ヤコブの肉欲的性質、自我や自己依存の性質が標的とされていたと指摘する。ヤコブのこのような性質を憎み、滅ぼそうとする神の姿が浮かび上がる。

また、Sailhamer はこの戦いを、ヤコブ物語の縮図として見ており、彼の人生が、神からの祝福を得るための格闘によって特徴づけられていると指摘する[14]。ヤボクの渡しの出来事をヤコブの人生の象徴的な出来事として

---

(8) デレク・キドナー、前掲書、212 頁

(9) 渡辺信夫『イサクの神、ヤコブの神—創世記講解説教』新教出版社、2010 年、143 頁

(10) Keil, *BCOT*, Accordance, paragraph 455.

(11) フォン・ラート、前掲書、596 頁

(12) F.B. マイアー著 湖浜馨訳『神と格闘した人 ヤコブの生涯より』、いのちのことば社、1985 年、122、124 頁

(13) 坂野慧吉『新聖書講解シリーズ 創世記』いのちのことば社、2010 年、345 頁

(14) John H. Sailhamer, *Genesis*, The Expositor's Bible Commentary revised edition 1, *Genesis-Leviticus*, ed. Tremper Longman III and David E. Garland (Grand Rapids:

見ると、「あなたが神と、また人と戦って、勝った」（28 節）とは、ヤコブの人生における数々の戦いは、第一に神との戦いであったことを示唆していると言える。また神は、ヤコブの内面的性質を打つために格闘をしかけた可能性が高い。

1.1.1.2.　格闘における緊張関係

しかし同時に、格闘にて神は劣勢を強いられ、ヤコブの足に致命傷を負わせながらも、ヤコブが勝利する。神がヤコブの滅ぶべき性質に敵対されたのであれば、ヤコブがなぜ人だけでなく神にも勝利するのかという疑問が残る。25 節の「その人はヤコブに勝てないのを見てとって、彼のももの関節を打った」という表現には、神は敗北しつつも、致命的な傷を負わせるという恐るべき力を秘めていることが分かる。ヤコブの勝利には、単純な勝利ではない緊張関係がある。夜中、神から仕掛けられて始まった格闘は、夜明けにはヤコブが神にしがみつき、祝福を求める格闘へと変化しているのだ。

Keil は、ヤコブの肉の力は、ももの関節が外れることによって無力にさせられたため、その後は信仰と祈りの力によって祝福されるまで、神にしがみつくことにより戦ったという変化を指摘している[(15)]。キドナーは、「敗北と勝利が一つになった」と表現する。戦いにおける主導権は神が握っており、ヤコブの勝利や祝福への欲望のすべてから、自己満足や高慢を取り除かれたという。ホセア 12 章 4 節がヤコブについて、「御使いと格闘して勝った」と強さを語ると同時に、「泣いてこれに願った」と弱さを語ることと重ねている[(16)]。坂野は、ももの関節が打たれたことは自我が打たれたことを意味し、ヤコブが神の祝福なしには生きられない自分を発見したと考える[(17)]。

Zondervan, 2008), 255.

(15) Keil, *BCOT*, Accordance, paragraph 455.

(16) デレク・キドナー、前掲書、212 頁

(17) 坂野、前掲書、345 頁

このように、ヤコブの勝利と、足の障害というある意味での敗北とは、切り離すことができない。両者の意味は、彼が得た祝福に内包されていると考えられる。ヤコブが得た祝福の実体とは何であったのか。

1.1.2.　ヤコブの得た祝福とは

ヤコブから神への祝福の要請は、29 節において答えられる。それは、神が彼の執拗な願いを聞き入れられたことによる。この祝福が何を意味するかについては明らかではないが、物質的な祝福とは考えにくい。族長的な祝福の場合、子孫繁栄や、土地、統治権の付与など、祝福の内容が明らかにされることが常だからである。また 28 章で約束された祝福が、ヤコブにすでに与えられていることからも考えにくい。それゆえこの祝福は、神の前における、彼の内面や本質に関わる祝福であったことが想定される。

1.1.2.1.　名前の変更

祝福の解釈について、ヤコブの改名と結びつける注解者たちがいる。Ross は、敵対者が尋ねた「あなたの名は何というのか」（27 節）という質問は修辞的であり、古い名前と新しい名前を対比させているという。この古い名前と新しい名前に表れる彼の本質的な変化の中に、祝福があると指摘する[18]。Sarna と Wenham は、名前の変更自体が祝福の本質だと考える[19]。ヤコブの名前の変更は、ヤコブの祝福の嘆願に続くものであるため（26 節）、ヤコブの求めに対する神の応答と見ることができる。また、名前の変更は彼の本質的な変化に関わるものであるため、それ自体が祝福であると考えられる。ヤコブが祝福を得るためには、まず自分の名前を告白しなければならなかった。古代において名前を問われることは、自らが何者であるかの告白を求められることであり、自らの本質を告白することでもあった[20]。ヤコブ物語において「ヤコブ」の名前は、彼自身と関連させられている。

（18）Allen P. Ross, “Studies in the Life of Jacob Part 2: Jacob at the Jabbok, Israel at Peniel,” *Bibliotheca Sacra* 137 (1980), 230.

（19）Sarna, *Genesis*, 227; Wenham, Genesis 16-50, 297.

ヤコブという名前は出生に関わっており、生まれてくる時、兄エサウのかかと（עָקֵב）をつかんでいたため、その語根からヤコブ（יַעֲקֹב）と名付けられた（25:26）。またのちにエサウは、ヤコブの名前と、動詞 עקב を関連させ、「あいつの名がヤコブというのも、このためか。二度までも私を押しのけて（הֲכִי קָרָא שְׁמוֹ יַעֲקֹב וַיַּעְקְבֵנִי）。私の長子の権利を奪い取り、今また、私への祝福を奪い取った。」（27:36）と述べる。ここで עקב は「押しのける、奪い取る」の意味で使用されている。実際、ヤコブはそれまでの生涯において、「かかとをつかむ者、押しのける者、奪い取る者」として描かれている。ヤコブの名前が彼の古い性質を指すものであれば、神はヤコブに自らの古い性質を告白させたということである。すでに見てきたように、神が敵対し徹底的に打ち砕こうとしたのが彼の古い性質であり、注解者たちが指摘するような「自我」であるなら、彼はこの性質を自分で告白する必要があったと言える。ヤコブが自らの存在を告白した時、神は「あなたの名は、もうヤコブとは呼ばれない。イスラエルだ。（עוֹד שִׁמְךָ כִּי אִם־יִשְׂרָאֵל לֹא יַעֲקֹב יֵאָמֵר）」と新しい名前を与える（28 節）。Hamilton は、‘they shall say no more’ または ‘it shall be said no more’ のイディオムが使われる際には、霊的大変革を示しているとして、名前の変更によりヤコブが劇的に変化したと考える。[(21)] すなわち「ヤコブ」に代わって「イスラエル」としての新たな本質が与えられたことが考えられる。

「イスラエル」の名前の由来は、彼が「神と、また人と戦って、勝ったから（כִּי־שָׂרִיתָ עִם־אֱלֹהִים וְעִם־אֲנָשִׁים וַתּוּכָל）」（28 節）である。יִשְׂרָאֵל は、「神」を表す אֵל と、「戦う」を意味する שׂרה の派生語と考えられる。しかし、יִשְׂרָאֵל の名前の解釈については議論がある。「神との戦い」という概念は、イスラエルの神学と相容れないため、実際の意味とは異なると考えられてき

（20）フォン・ラート、前掲書、589 頁

（21）Victor. P. Hamilton, *The Book of Genesis Chapters 18-50*, The New International Commentary on the Old Testament 2 (Grand Rapids: William B. Eerdmans Publishing Co., 1995), 333–334.

（22）Wenham, *Genesis 16-50*, 296.

た[22]。Albright は ‘God heals’ を意味すると主張する[23]。Coote は、判決や命令を言い渡すことによって統治する ‘El judges’ を意味すると考え[24]、North も、‘he will rule as God’ あるいは ‘prince’ と訳せるという[25]。しかしキドナーはこれを否定し、「神よ、（彼のために）戦ってください」を意味するという。しかし同時に、創世記の他の名前の例より、名前が付けられたきっかけによって新たな意味合いを帯びることがあることから、יִשְׂרָאֵל の名前は、ヤコブの奮闘と、それによって表されたヤコブの性質を記念していると主張する[26]。יִשְׂרָאֵל の語源は不明瞭ではあるが、神は「あなたが神と戦い、人と戦って、勝った」（28 節）ために、「イスラエル」という新しい名前と本質を与えていることは確かである。

1.1.2.2.　勝利の意味

それでは、この神と人との戦いにおける勝利とは何を意味するのか。遠藤は、ヤコブにとっての勝利とは、神の祝福を勝ち得たことだと指摘する。ヤコブがここで祝福を求めているのは、これまで自分の手で奪ってきた祝福では満たされず、本物の祝福を求めているからだという。それは、自らのたましいが神の前に失われた状態であり、神によって祝福され救われる必要があるとして、たましいの問題が最も深刻な課題であると理解したからだと述べている[27]。ヤコブのこれまでの人生自体が祝福を求める戦いであり、彼の祝福に対する求めが神に受け入れられたため、ヤコブは勝利を手にすることができたと言える。

（23）William Foxwell Albright, “The Names ‘Israel’ and ‘Judah’ with an Excursus on the Etymology of Tôdâh and Tôrâh”, *Journal of Biblical Literature* 46 (1927), 156,57.

（24）Robert B. Coote, “Meaning of the name Israel,” Harvard Theological Review 65 (1972): 141.

（25）Gary North, *The Dominion Covenant: Genesis*, An Economic Community on the Bible vol. 1 (Texas: Institute for Christian Economics, 1987), 201.

（26）デレク・キドナー、前掲書、213 頁

（27）遠藤嘉信『私を祝福してくださらなければ―荒削りの信仰者ヤコブの生涯』いのちのことば社、2006 年、204,205 頁

またこの勝利にはパラドックスが見いだせる。Calvin は、神は敵対者として攻撃すると同時に、ヤコブを守り、神の攻撃力より大きな抵抗力を与え、信仰の勝利を与えたと述べている。[28] Wenham は、ヤコブは神との戦いに勝利するが、同時にヤコブの勝利を許したのは神だという。[29] 神は、ヤコブと戦われると同時に、ヤコブに勝利を与えている。そのため、このヤコブの勝利は、神がヤコブの古い性質に戦いを挑み、それを殺したという、神の勝利と見ることもできる。つまりヤコブの罪深い性質に勝利された、神の霊的な勝利に、ヤコブ自身もあずかったと考えられる。これは「私は顔と顔を合わせて神を見たのに、私のいのちは救われた」（30 節）という、救いの経験と重なるものである。イスラエルにとって、神の顔を見ることは死を意味していたが（出 33:20; 士師 6:22;13:22）、ここでヤコブは、神の顔を見てもなおいのちを救われたという経験をした。それは、罪の性質が砕かれることで、新しくされた勝利者として、神に受け入れられたことを意味する。そのため、霊的な救いとも言えるだろう。

1.1.2.3.　足の障害の意味

格闘を終えたヤコブのもう一つの変化である、足の障害の意味について考える（25,31 節）。格闘中、ヤコブのももの関節は、神に打たれ、外れたため、彼は生涯足を引きずる者となった。

注解者たちは、足の障害を霊的な変革と不可分のものとして理解している。Calvin は、この傷と弱さは、信仰者の肉の高慢さが謙虚さと結びつき、弱さの中で神の力が完全に働くためだと述べる。[30] Keil は、肉欲的な性質にかかわる霊的な格闘が、肉体的な痛みを伴う現実の格闘と不可分であることを示しているという。[31] マイアーも、神がももの関節を打ったのは、神が祝福しようとするたましいから、神に抵抗する力や霊的祝福を奪うものを

（28）Calvin, *Genesis*, 196.

（29）Wenham, *Genesis 16-50*, 303.

（30）Calvin, *Genesis,* 198

（31）Keil, *BCOT*, Accordance, paragraph 455.

打たれたことを示しているという。また、ヤコブがその後も足を引きずることになったのは、古い性質に属するものは萎えて、主にしがみつく力しか持たない新たな性質が勢いよく表れるためであるという。[32] ブルッグマンは、足の障害とは「イスラエル」のしるしであり、新しい名前の実質だという。足を引きずるゆえに敗北したと同時に、勝利のゆえに堂々と生きることは、その後彼が自らと他者に対し、「この聖なる方に対しては困難を伴わないような勝利はない」ことを示すためだという。[33] キドナーは、ヤコブは体を損なうことで、闘争的な人物から根気強く頼る者に変わったと述べる。[34] 遠藤は、神がヤコブの頑迷さを打ち砕き、彼を新しくした祝福のしるしであるとする。[35] つまり、足の障害とは、古い性質の死滅と同時に、勝利に伴う新しい性質の表れでもあると言える。

このようにヤコブは、足に障害を負うことで、自分以外の存在に頼ることが必要不可欠となった。ヤコブの、神の祝福に執着するという元来の性質は、砕かれると同時に、神に拠り頼むという新しい方向性の中で継続するものとも考えられる。つまり足の障害は、名前の変更における本質的変化を、目に見えて体験できるかたちで生涯覚え続けるしるしなのである。格闘の結果ヤコブにおきた変化である、名前の変更と足の障害とは、同じ本質の変化を象徴するものであり、古い性質が砕かれ、神に受け入れられる新しさ、霊的な救いを得たことのしるしと言える。

1.1.3. 小結

以上、ヤボクの渡しの出来事におけるヤコブの変革を考察した。神の、ヤコブに対する格闘は、ヤコブの古い性質を滅ぼすことを目的としていたと言える。それは彼が自らを「ヤコブ」として告白し、ももを打たれ、足

(32) マイアー、前掲書、122 頁
(33) ウォルター・ブルッグマン、向井孝史訳『現代聖書注解 創世記』日本基督教団出版局、1986 年、454 頁
(34) キドナー、前掲書、212 頁
(35) 遠藤、前掲書、206 頁

の障害を負うことにおいて表されている。この古い性質について、一部の注解者は、内面的な罪の性質として、肉欲的な性質、自我、自己依存などとして表現している。この性質については、彼の生涯全体から観察する必要があるため、以下の 1.2 において取り組む。この格闘はヤコブにとって、古い性質を砕かれたという意味での敗北であると同時に、祝福を得て、いのちを救われ、新しく「イスラエル」として生きるという意味での勝利であった。神と直接対決して、人が勝利し、いのちを救われるという体験は、神に受け入れられる、霊的な救いの経験として見ることができる。敗北と同時に勝利、つまり古い罪の性質の死と同時に、新しい人の誕生とも言える。この霊的な変化は、新しい名前と足の障害がしるしとなって、生涯ヤコブ自身と人々とに証したと考えられる。[36] 特に足の障害は、もはや自分の力に頼ることなく、生涯かけて神と神の祝福にのみ拠り頼む、霊的勝利者としての性質を象徴するものと考えられる。この格闘は、リベカの胎内から始まっていた、契約の祝福を受け継ぐための戦いの一つの終局といえる。[37] この格闘の結果、ヤコブは人生の新たな段階に入ったと言われるように、[38] ヤボクの渡しの出来事は彼の決定的な自己変革の出来事であったと考えられる。

ただ、ヤコブの罪の性質は滅ぼされる必要があったが、彼の祝福を求める執拗な求めそのものは神に受け入れられ、祝福を得ることに繋がったことを踏まえると、肯定的に評価されていると見ることもできる。祝福を得た結果、祝福に対する野心的な執着心は消えるが、神の祝福に拠り頼むという側面は、足の障害にも象徴されており、その後も継続する資質として考えることができる。32 章以降に「イスラエル」とともに「ヤコブ」が使用されている事実は、ヤコブの祝福に対する態度が継続していることを示していると想定される。それゆえ、彼の祝福に対する態度がどのように

(36) ミカ 4:6,7; ゼパ 3:19 は、足の障害が救いのしるしであることを示唆している。

(37) 舟喜、前掲書、219 頁

(38) Keil, *BCOT*, Accordance, paragraph 455.

評価され、変化していくのか、その経過についても観察する必要がある。

1.2.　ヤコブの生涯におけるヤボクの渡しの出来事の意味

ヤボクの渡しにおける出来事は、彼の人生にどのような変化をもたらしたのだろうか。祝福に対するヤコブの執拗さは、結果的にヤボクの渡しにおける勝利と祝福の獲得へと繋がった。それでは、ヤコブの滅ぼされるべき古い性質とは何であったのか。ここでは、創世記 25 － 49 章におけるヤコブ物語全体より、ヤコブの性質を観察する。

「ヤコブ」の名前に象徴された彼の古い性質について、注解者の中にそれを「自我」と呼ぶ見解が見られた。日本語の「自我」は、意識や行動の主体としての自己を示すが、心理学的には、人間の発達において確立されていく肯定的なものとして定義される[39]。一方、哲学者の中には、超越的存在としての神と区別される、有限な人間存在として定義する者もいる。その視点からは、「自我」を絶対視・偶像視することから解放する「自我の崩壊」が重視されている[40]。この哲学的な「自我」は、1.2 において注解者たちが指摘したヤコブの砕かれるべき「自我」と同じとは言えないが、類似点も見いだせる。またこのヤコブの古い性質は、日本語の「我」が意味する、自分本位な考えや主張、こだわり、意地に近いものがあると考えられる[41]。

ヤコブの古い性質を「自我」と指摘する注解者に同意するが、日本語の「自我」や「我」を使うと曖昧な部分が出てくるため、本稿では「自己中

(39)「自我」日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典』第二版、小学館、2000 － 02 年、「自我」松村明編『大辞林・第三版』三省堂、2006 年

(40)「汝自身を知れ」フランク・B. ギブニー編『ブリタニカ国際大百科事典 小項目辞典』ブリタニカ・ジャパン、2014 年、細川亮一「自我」『日本大百科全書』小学館、1984-94 年

(41)「我」小学館『大辞泉』編集部編、『大辞泉・第二版』小学館、2012 年、「我」柴田武、山田進編『類語大辞典』講談社、2002 年

心性」として表現する。その意味するところは、神を退ける自己中心的な主張、利己心である。

1.2.1. 神が求める資質としての תָּמִים

それでは、ヤコブの人生に見られる性質を観察する。創世記においては、特定の出来事や人物についての直接的な評価はほとんど見られない。しかし創世記 6 章 9 節では「ノアは正しい人で、彼の世代の中にあって全き人（תָּמִים）であった。」と、ノアが תָּמִים であったと記されている。また 17 章 1 節ではアブラハムに対し、תָּמִים であることが命じられている。つまり תָּמִים とは、正しい人の性質であり、神が信仰者に望んでいる性質であることが読み取れる。תָּמִים の語根 תמם には、「完了」「完全」「欠けのない状態」という意味がある[42]。Sarna は תָּמִים を、倫理的、道徳的な完全さとして理解する[43]。Wenham は、神との関係における前提条件としての、不正を避けることや、主のおしえに従うことを意味すると考える[44]。一方、舟喜は、道徳的完全性ではなく、神との関係性における健全さ、完全さを示し、契約関係における誠実さに繋がる性質と考える[45]。Hamilton は、תָּמִים が אֱמֶת とともに用いられる用例から、透明性や、率直さという概念があることを示唆していると述べる[46]。ノアやアブラハムの個々の言動について、道徳的な要求や評価が記されていないことを踏まえると、תָּמִים は、道徳的完全さというよりも、誠実さや偽りのない性質を意味していると考えられる。この性質は、のちに申命記 18 章 13 節にて、イスラエルの民にも求められている。

そのため、この תָּמִים という性質を軸に、ヤコブの性質を観察することが可能である。ヤボクの渡しの出来事の前後におけるヤコブの言動から、誠実さや偽りのなさといった תָּמִים の性質に照らして、（a）個々の具体的な

（42）B. Kedar-Kopfstein, ‘תָּמִים,’ in *Theological Dictionary of the Old Testament*. vol. 15, ed. Botterweck, G. J. & H. Ringgren (Grand Rapids: W. B. Eerdmans, 1974-2015), 702.

（43）Sarna, *Genesis*, 50.

（44）Wenham, *Genesis 1-15*, 170.

（45）舟喜、前掲書、158 頁

（46）ヨシュ 24:14、士 9:16,19. Hamilton, *The Book of Genesis Chapters 1-17*, 461.

出来事に見られるヤコブの自覚的な性質と、（b）無自覚と思われる領域に見られる性質を、可能な限り観察する。その上で、ヤボクの渡しの出来事の前後における、ヤコブの性質の変化を明らかにする。

1.2.2.　ヤコブの内面的変化【巻末資料①】

ヤボクの渡しの出来事以前のヤコブの性質を観察すると、祝福に対する執着心という点では一貫性があるが、祝福の理解や態度においては漸進的な変化が見られる。

聖書記者はヤコブについて、エサウが「巧みな狩人、野の人」であったのに対して、אִישׁ תָּם יֹשֵׁב אֹהָלִים「ヤコブは穏やかな人で、天幕に住んでいた」（25:27）と表現している。ヤコブの性質を説明する形容詞 תָּם の語根は、תְּמִים と同じ תמם である。しかしこの箇所では、野に生きるエサウとの対比として、天幕生活を好むヤコブが描かれていることから、「穏やか」、‘quiet’（ESV）、‘plain’（KJV）と訳されている[47]。そんなヤコブには、長子の権利と祝福をめぐる姿に見られるように、当初から祝福に対する深い執着心があった。彼は兄エサウの弱さに付け込み、母と共謀して父を欺くという卑劣な方法で、長子の権利と祝福を手に入れた。そのため、25 章 27 節であえて תָּם と表現されていたことには、誠実さとは裏腹の、偽りや不誠実さに対する皮肉が込められている可能性もある。

さて、ヤコブはエサウから逃亡することになるが、そのような彼に神はベテルで現れ、族長への約束の継承とともに、ヤコブの守りを約束する。一方ヤコブは、神に衣食と旅の守りを求める（28:10-22）。

当初のヤコブは、その方法こそ姑息ではあるが、エサウとは異なり、神の祝福のもつ価値への敏感さとこだわりを持っていた。ただ、彼の祝福についての理解は、物質的なものや、身の安全の確保と結びついており、漠然とした理解と個人的関心に留まっていた。そのため、族長たちに続く、神からの祝福の約束は十分に理解していなかったと考えられる。

（47）‘well-behaved, civilized,’ ‘תָּם,’ *HALOT,* 4:1742-1743. Keil は、家での静かな生活の喜びを見出す気質を示すという。Keil, *BCOT*, Accordance, paragraph 381.

続くハランでの20年間の生活は、叔父ラバンを欺いて逃げ出すという形で終わる（31:17-21）。ラバンと別れる際、彼は長年の不当な扱いに忍耐し、誠実に仕えてきたことを訴えている（31:36-42）。その20年の間、彼には神によって豊かな財産が与えられた。最終的に彼は、神の導きによりラバンと和解し、カナンの地へ旅立つ。ここに、ヤコブが忍耐と誠実によって叔父に勝利した姿が見られる。ただヤコブは、ラバンに欺かれたという被害者認識を持っていたが、ヤコブもまたラバンを欺いていたと言える[48]（31:20,26,27）。

32章からヤコブは、エサウとの再会を前に非常な恐怖に襲われ、必死の備えをする。神に切実に助けを祈り求めるものの、直後にエサウの怒りをなだめるための贈り物を用意しており、強い自己保身も見られる。それでもなお拭えない不安と無力さの中で、神との格闘に至ったと考えられる。このようにヤコブには当初から祝福に対する強い執着心があったが、彼にとって祝福とは物質的なものと絡み合ったものであり、自分の安全確保のためといった性格のものであった。祝福獲得に向けた態度には、תָּמִים の性質とは真逆の、人への欺きや自分の力に頼る、自己中心的な性質がある。しかしそこには漠然とではあるが、神の祝福を求めて、それを敏感に捉える心があり、そのような彼を神は守り導いている。その後ヤコブはラバンの下での生活を通して、祝福の獲得方法においてはラバンを欺きつつも、忍耐と誠実を学び、神の祝福と守りを体験し、次第に神に祈り頼ることを学んでいく。また財産や家族が豊かに与えられつつも、自分の無力さを痛感する中で、なお満たされない思いを抱く。そこから彼の祝福への求めはより霊的なものへ向かっていったと想定される。ヤボクの渡しに一人残った時のヤコブは、自分の無力さを自覚する中で、自己保身の思いが際だった状態にあったと思われる。そのようなヤコブに、神は戦いを挑み、ヤコ

（48）原文では、ヤコブがラバンの心を盗んだ（וַיִּגְנֹב יַעֲקֹב אֶת־לֵב לָבָן）（31:20）と述べられている。「心を盗む」（גנב + לֵב）とは、創32:20,26と、IIサムエル記15:6に登場する。これはヘブル的表現であり、厳密なことは言えないが、ヤコブもまたラバンを欺いていたという事実は認められる。

ブの強い自己中心的な性質を認めさせ、告白させたのである。

ヤボクの渡しの出来事を経て、ヤコブはエサウとの関係の刈り取りをすることにはなるが、その姿は以前とは異なり、逃げ隠れたり、恐れや善悪を論じたりする姿は消えている。直接に顔を合わせて向かい合い、へりくだって和解を喜び、贈り物をしきりに勧める姿が見られる。物質的祝福に対する固執はもはや見られず、むしろ祝福を与える側となる（33 章）。その後、ディナ凌辱事件や（34 章）、ラケルの死（35:16-20）、ルベンの不当な行為（35:22）、父イサクの死（35:27-29）、ヨセフの死の知らせ（37:12-36）という悲劇が続く。それらに対するヤコブの基本的な態度としては、喜びや悲しみの表現は各所に見られるが、怒りの表現はなく、感情を露呈することはほとんどない。ヨセフの死を嘆く時にも、他者を責めることなく、ひとりで嘆いている。また言動については、自らの判断による能動性はあまり見られない一方、神の約束や計画を待望し、神の声には素早く応答している（35:1-15; 46 章等）。他者に対しては、悪を行った親族や敵対者に対しても、優劣を問わず、善悪を論じず、敵対することもない（34 章 ; 35:22）。ヨセフ物語の展開においては、ヨセフやベニヤミンへの偏愛が見られる（以下、1.3 参照）。ヤコブの晩年が近づくにつれて、彼に関する記述は少なくなるが、彼の全体的な言動には柔和さが表れていると言えるのではないだろうか。

以上のように、ヤコブの生涯において、元来の祝福に対する執着心は、神の霊的な祝福を得ることへと繋がった。しかし他人を欺く自己中心的な性質に関しては、打ち砕かれることになる。それゆえ 33 章以降の彼は、物質的祝福に対する執着を失い、神に拠り頼んだ、控えめな人物へと変化している。

1.3. 「ヤコブ」と「イスラエル」の名前の使い分け（創 33 − 50 章）

以上、ヤボクの渡しの出来事が、ヤコブにとって決定的な転換点となったことを観察した。しかしそれ以降で特徴的なことは、32 章 38 節で新し

い名前が与えられて以降も「ヤコブ」と「イスラエル」の名前が継続して、入り混じるようにして使用されている点である。アブラハムやサラの場合に、新しい名前を与えられて以降、古い名前が使われていないこととは対照的である。そのため、33 − 50 章に登場する「ヤコブ」と「イスラエル」の名前の用法において、使い分けに意味があるのかどうか、また、それと彼の性質とに関連性があるのかどうかを考察する。

1.3.1. 名前の使い分けに関する注解者の見解

「ヤコブ」と「イスラエル」の名前の使い分けについて、多くの注解者は注目していない。Sarna は、二つの名前は無差別に交換されているとして、使い分けに意味はないと考える。[(49)]「ヤコブ」が 33 章以降も継続して使用されることから、彼の性質の連続性に注目する注解者もいるが、名前の使い分けの用法についての分析は少ない。[(50)]

一方、Wenham は名前の意図的な使い分けに注目する数少ない注解者の一人である。Wenham はまず、名前の変更は、ヤコブの新しい性格と運命を告知したと見る。そして「イスラエル」が国の名前であるだけでなく、「イスラエル」としての「ヤコブの再生」が重要だと指摘する。さらに、彼の子孫たちが、「イスラエル」の名前を聞いたり自分たちを指して使う時はいつも、名前の起源である彼らの父祖が、人々や神と戦って勝利したことを想起したり、最終的な勝利を望んでいたと考えられるという。また、新しい名前「イスラエル」は、神と人との平和という新しい性格に彼を導

(49) Sarna, *Genesis,* 225.

(50) Keil は、「イスラエル」とは信仰による霊的状態を意味するという。「ヤコブ」と並行して使われるのは、生まれつきの状態が新しい人と並行して続くからであると考える。(Keil, *BCOT*, Accordance, paragraph 455.) Hamiton は、33 章以降は、「ヤコブ」から「イスラエル」へとどのように変革されているかのテストケースであるという。(Hamilton, *The Book of Genesis Chapters 18-50*, 339.) 文書資料説では、「ヤコブ」と「イスラエル」が同じ節で用いられる際は、E 資料と J 資料のしるしだとされる。舟喜はこの説を退け、常に正確な使い分けはないが、文脈によっては意図的であるとする。(舟喜、前掲書、252 頁)

くと考える。

Wenham は、名前の使い分けにおける 4 つの原則を提示している。

①「ヤコブ」は「イスラエル」より頻繁に使用されている。「ヤコブ」が通常の用法であり、「イスラエル」は例外的用法である。

②散文では「ヤコブ」は常に歴史的個人を指すが、「イスラエル」は時に「人々」を指す（46:8; 47:27; 48:20）。

③「イスラエル」が個人に使用される時、一族の頭としての立場を暗示する（43:6, 8, 11; 46:1; 48:2）。一方「ヤコブ」は人間的な弱さが明白な場面で使用されている（37:34; 42:4, 36; 47:9）。これは名前の語源に一致し、「ヤコブ」は「闘争者、欺く者」、「イスラエル」は「神に勝つ者」である。それゆえ、「ヤコブ」が力を取り戻した時には「イスラエル」になる（45:28; 48:2）。

④ヨセフがいる場面では「イスラエル」が好まれる[(51)]（37:3, 13; 46:29, 30; 48:2, 8, 11, 14, 20, 21; 50:2）。

Wenham は、32 章以後のヤコブにも古い性質が継続していると考えるため、分類③では、「ヤコブ」が人間的な弱さや、古い性質が表れている時に使用されていると考える。また、ヨセフに対する偏愛についても、彼の古い性質の表れであるとして、否定的な評価を下している。しかし、ヤボクの渡しの出来事がヤコブの資質に決定的な変革をもたらしたと考えるならば、名前の使い分けが、彼の新しい資質とどのように関連しているのかについて改めて考察する必要がある。

1.3.2.　名前の使い分けの分析

Wenham の分析を参考に、基本的に使用回数の少ない「イスラエル」を例外的用法として注目する。その上で、名前の指す対象、名前の意味との関連、他者との関係、文脈における主題や、場所との関連についても整理する。

創世記 32 章の名前の変更以後、33 － 50 章で「ヤコブ」は 86 回、「イ

（51）Wenham, *Genesis 16-50*, 297-301,350

スラエル」は 42 回使われている。ヨセフ物語以前の 33 － 36 章と、以後の 37 － 50 章を比べると、「ヤコブ」の使用回数はそれぞれ 41 回と 45 回であり、大差ない。しかし「イスラエル」は 8 回と 34 回であり、ヨセフ物語では圧倒的に増えている。それゆえ Wenham の分析のように、「イスラエル」の使用はヨセフの存在と密接であると考えられるため、ヨセフ物語の前後に分けて、名前の用法を分析する。

1.3.2.1.　ヨセフ物語以前（33 －36 章）【巻末資料②】

33 －36 章において、「ヤコブ」は 41 回、「イスラエル」は 8 回使用されており、ヤボクの渡しの出来事以降も引き続き、圧倒的に多く「ヤコブ」が使われている。

まず、「ヤコブ」は、歴史的個人、族長として使われる（33:17, 18; 35:1-15）。家族関係においては、弟（33:1-15; 36:6）、父（34:1-30; 35:22）、夫（35:29）、息子（35:27, 29）として使われ、息子たちや娘ディナも「ヤコブ」の名をもって呼ばれる（34:1-27）。姿勢としては、エサウとの和解においては、へりくだりつつ堂々と向き合い、物質的祝福に執着しない（33 章）。その後の度重なる家庭の問題や死に対しても、善悪を論じず沈黙し、控えめである（34,35 章）。名前の意味との関連では、目に見える祝福ではなく、霊的祝福に満たされており、新生したヤコブと言える。また、アブラハムの約束の継承者であり、神の導きに従って約束の地を目指し、神を礼拝する（33:17, 18; 35:1-15）。一方、「ヤコブ」の名で呼ばれる息子たちは、他者を欺いて戦う性質をもつ。

「イスラエル」は、祝福や約束の内容に関わる際に使われる。それは、エサウとの和解を経て、約束の地で礼拝した際の祭壇の名前であり（33:20）、神に祝福され、約束を継承した時に呼ばれた名前である（35:9）。また、子孫の約束を受けた後、ベニヤミンの誕生とラケルの死を経験し、旅を続けるのは「イスラエル」である（35:21, 22）。約束を継承する「民」として示唆される時にも使われる。異邦人との関わりや凌辱に対して、神の民としてのあり方を示唆する際や（34:7; 35:22）、後の神の民を指す時に使われる

(36:31)。長男ルベンの不当な行為（35:22）については「イスラエル」が聞いているとされているが、後に下されるさばき（49:4）との関係からは、権威ある神の視点が反映されていると考えられる。

1.3.2.2.　ヨセフ物語（37－50 章）

ヨセフ物語における名前の使い分けを観察すると、「ヤコブ」は、立場としては、約束の継承者、一族の長、歴史的個人である（37:1, 2; 37:1,2; 46:5-27; 47:7-10, 28）。また、後の民としての集団を指すこともある（49:7, 24）。父としては、12 人息子の父（42:26, 35; 45:25, 27; 49:1, 29-33, 50:12）、ヨセフを失って悲しみに浸る父（37:34）、ベニヤミンを偏愛し手放さない父である（42:4, 36, 38）。ヨセフ物語以前の悲劇や死の場面では描かれなかったが、ヨセフ物語では彼ヤコブの感情も描かれている。ほかにも、ヨセフの呼び寄せを聞いて茫然とするが、エジプトからの車を見て元気づいたという心境の変化や（45:27）、わざわいを認め、神の祝福を失う悲劇に対する率直な嘆きが描かれる（47:9）。ここに、欺かれる経験や悲劇において、人に期待せず、神の祝福にすがって生きる、「新生ヤコブ」の姿が見られる。[52] また、ヨセフに主眼が置かれた文脈においては、聖書記者がヨセフの父に対する感情を反映させた表現として「ヤコブ」を使用していると思われる（48:2, 3, 12）。

約束との関係では、「ヤコブ」は父祖たちに続く約束の継承者である（46:2; 50:24）。神があえて「ヤコブ」と呼びかける時は、人間ヤコブに対する親しみをこめた呼びかけであると考えられる(46:2)。祝福される子どもたちは「ヤコブの子」と呼ばれる（49:2）。祝福を与える側である時は基本的に「イスラエル」であるが（48 章 , 49:2)、神の民としての約束の継承者ではないファラオに対しては、「ヤコブ」として祝福を与える（47:7, 10）。約束の地との関係では、カナンの地にとどまっている状態において「ヤコ

(52) このようなヤコブの姿に、アブラハム、ノアについて言われていた תָּמִים の資質を認めることができるのではないか。上記、1.2.2 を参照。（指導教官である木内伸嘉先生の指摘による）

ブ」が好んで使われる（42:1, 29, 36, 38; 45:25）。ベニヤミンをカナンの地にとどめておく場合も同様である（42:4, 36, 38）。

つまり「新生ヤコブ」は、神の約束を継承し、神に祝福され、そこにとどまろうとする人物である。神の祝福を損なうような悲劇を経験するが、その苦しみや痛みを率直に認め、嘆いている。彼の信頼と関心は、神自身にあり、神の約束・祝福に拠り頼む者であると言える。

一方「イスラエル」は、個人だけでなく、息子たちや（42:5; 45:21; 46:5）、一族や民を指すなど（49:7, 16, 24, 28; 50:25）、「ヤコブ」以上に広がりをもつ名称である。個人としては、ヨセフを偏愛する父として、おもにヨセフと実際的な関わりを持つ場面で使われる（37:3, 13; 46:29, 30; 47:29-31; 48:2, 21）。偏愛の性質はベニヤミンに対しても見られるが、ヨセフに対しては「イスラエル」と使い分けられていることから、ヨセフが特別な存在として描かれていると考えられる。

ヨセフの住むエジプトとの関係では、エジプトに向かう息子たちや（42:5; 45:21; 46:5）、一族（46:8）、エジプトに住み、増える民（47:27）を指して使われる。個人としても、カナンの地にとどまっていた状態では「ヤコブ」と呼ばれていたが、エジプトに向かう心境の変化においては「イスラエル」と呼ばれる。ユダのとりなしを経て、エジプトにベニヤミンを向かわせることを決め（43:6-14）、自らも向かうことを決めたのは「イスラエル」である（45:28; 46:1, 2）。これは一族、国民単位の救いへと繋がることになった。死後にミイラにされる時は「イスラエル」と呼ばれているが（50:2）、これはヨセフの命令によるためだと考えられる。もしくはカナンの地での埋葬という、のちにエジプトを出てカナンの地に向かう民との関連が示唆されているとも考えられる。

また祝福を与える際には、「イスラエル」が好まれる。マナセとエフライム（48:8-21）、12 人の息子たちを祝福する父は「イスラエル」である（49:2）。また、他者を祝福する民としての「イスラエル」も示唆される（48:20）。

このように「イスラエル」は、ヨセフやエジプトとの関連で好んで使わ

れ、個人、息子たち、一族を指している。エジプトに下る人々や、エジプトに住んで増える民、カナンの地での埋葬など、神の導きや約束の実現に関する場面においては「イスラエル」が用いられる。父イスラエルが特別に愛したヨセフは結果的に、神の導きにより、エジプトにおける一族の救出の道を備えた。また、祝福を与える側としても「イスラエル」が好まれる。総じて、神の特別な約束と導きに従う存在が「イスラエル」である。またその結果として「イスラエル」は救出され、勝利を与えられる。その「イスラエル」が、今度は他者を祝福する主体となる。

1.3.3.　名前の使い分けについての再評価

「ヤコブ」「イスラエル」という名前の使い分けについて、Wenham の分類を参考に筆者自身の観察を提示してきたが、その使い分けの評価について、Wenham とは一部、重要な点で異なる評価を以下に提示したい。要約すれば、33 章以降も引き続き「ヤコブ」がおもに使われるが、例外的に「イスラエル」が使われ、特に 37 章のヨセフ物語では頻出する。「ヤコブ」はおもに、族長、歴史的個人、家族関係において使用される。しかしヨセフとの直接的な関係においては「イスラエル」がより多く使われる。「イスラエル」は、個人だけでなく一族や民などの集団を指す名称としても使用される。

約束や祝福との関連では、「ヤコブ」は、約束の地カナンにとどまる時、神から祝福や約束を「受ける」時、神から直接呼びかけられる時など、神に選ばれ祝福された人間ヤコブに焦点がある際に使用される傾向がある。一方「イスラエル」は、エジプトに向かう際や、息子たちに祝福を「与える」時など、神の計画の推進者として行動する際に使用される。

Wenham が分類③で指摘する、古い性質や人間的な弱さが露呈する場面で「ヤコブ」が使用されているという解釈については、異なる視点で観察できる。ディナ凌辱事件への沈黙は（34 章）、不可解な側面もあり、議論も必要であるが、エサウとの和解の際に見られたように、安易に善悪を論じないという姿勢と通じるものがあるのではないだろうか。また、ヨセフ

を失ったゆえの嘆き（37:34）、ベニヤミンを失うことへの恐れ（42:4, 36）、自らの人生のわざわいを認める姿は（47:9）、率直に苦難を認め、神の祝福を失うことを嘆く姿である。ヤボクの渡し以降でヤコブが足を引きずるように、苦難の中で、自らの弱さを認め、人に期待せず、神にのみすがり続ける姿と言えるのではないだろうか。また、力を取り戻した時には「イスラエル」となるという観察についても、神の勝利にあずかることへの示唆や（45:28）、ヨセフの「父ヤコブ」に対する視点が反映された表現として見ることができる（48:2）。以上のような箇所で、注解者の多くは 33 章以降の「ヤコブ」の控えめな態度や、感情的な姿を、古い性質に逆戻りするものとして否定的に捉える。しかし、それはむしろ、神の祝福を失うことを率直に嘆く姿であり、物質的祝福や、他人や自分にも頼らず、神とその祝福にのみとどまり、拠り頼み続けようとする、「新生ヤコブ」の姿と見ることができる。そのような「ヤコブ」に、神は親しみを込めて呼びかけ、祝福を与えているのである。

「イスラエル」の使用についても、ヨセフとの関係性に触れる際や、エジプトに向かう際、祝福を与える際に使われることは注目に値する。ヨセフへの偏愛は否定的に評価されることが多い。しかし結果的にイスラエル一族をエジプトに導き出し、救いをもたらした点からすると、「イスラエル」のヨセフに対する特別な愛は、一族に救い、勝利、祝福をもたらす、神の視点の反映として見ることができる。また「イスラエル」が聖書記者によって唐突に使用されるディナ凌辱事件においては、凌辱や異邦人との姦通を恥辱とする神の民の在り方についての示唆を与えており、ルベンの不当な行為においても、後に父「イスラエル」としてのろいを宣言する立場にも通じる。そのため、「イスラエル」の使用においては、神の導きや神の視点を反映させていることが考えられる。

1.4.　小結

第 1 章では、創世記 25 －49 章より、ヤコブの生涯における霊的変化を

観察した。ヤコブは「押しのけ、奪い取る」者として、名前の通りの人生を歩んできた。父と兄、叔父を欺きながら、自分が祝福を得るために、自分の力により頼み、人々と戦ってきた。人一倍、祝福に対する執着心を持っていたが、神はそのようなヤコブを、当初からエサウに代わる長子とし、アブラハム、イサクに次いで祝福を与え（27:27-29）、神の臨在を味わう者としてきた（28:10-22）。

ヤコブはそのような戦いに満ちた歩みの中で、自分の欺きの刈り取りをしながら、叔父の下や、妻たちとの緊張関係の中で、次第に、忍耐や誠実を学んでいった。知恵と力に富み、財産も家族も手に入れたヤコブであったが、約束の地への帰還とエサウとの対面を前に、自分の力に対する限界と、絶望とに追い込まれていった。そのような時に、ヤボクの渡しにおける、神との正面対決に至る。格闘に勝利したヤコブには、新たな名前「イスラエル」が与えられるが、足の障害を負う。これは彼にとって古い性質が砕かれると同時に、神の祝福を得て、霊的に新生した出来事であった。ここではじめて、彼のこれまでの戦いが神との戦いであったことが明らかにされ、その戦いの目的とは、彼の自己中心性を滅ぼすこと、それこそ彼の救いであったと観察できる。

このように、ヤコブはたしかに神に選ばれた祝福の継承者であり、それゆえに神の臨在と保護を受けてきた。しかし神の祝福の器となる族長としての霊的な資質は、彼の生涯の歩みの中で漸進的に養われていった。言い換えれば、ヤコブは神と人と戦うことを通して、自らの力の限界に気づき、自己依存と自己中心的な性質を漸進的に砕かれていったのである。その過程を経て、決定的に神と対峙した時、彼の砕かれた性質と祝福への求めは、神に受け入れられる救いの体験となった。その後の「新生ヤコブ」、「イスラエル」は、祝福を求めて神や人と戦うことはなく、神に拠り頼んだ、全体的に控えめな人柄へと変化している。一般に古い性質への逆戻りとされるいくつかの言動も、神の祝福にのみすがって生きることから来る控えめさや誠実さとして、むしろ「新生ヤコブ」の姿を映し出すものとして見ることができる。またヨセフやベニヤミンに対する偏愛がみられ、とりわけ

ヨセフに関わる際には「イスラエル」として表現されることは、神のヨセフに対する特別な選びと、ヨセフを通しての一族の救出と祝福を反映したものと考えられる。

以上のように、ヤボクの渡しにおける出来事は、戦いという点で、彼のそれまでの人生を象徴しており、その至り着いた心の状態も、彼のその後の人生を象徴している。しかも、注目すべきことは、その霊的資質が、彼ヤコブにとどまらないという点である。彼の子孫が彼の新しい名をもって「イスラエルの子ら」と呼ばれる事実は、彼らもまたヤコブの至り着いた資質を帯びるように期待されていることを示している。[53] 従って次の段階として、ヤコブの至り着いた資質と、イスラエルの民に期待されている資質との関連性を探るべく、出エジプト記、レビ記より、シナイ契約と律法の目的に注目する必要がある。

（2）に続く

（53）ヤコブのヤボクの渡しの出来事と、後のイスラエルの民との関連性については、注解者たちにより指摘されている。ただ、その霊的側面の変化についての考察はより深められる必要がある。Keil は、ヤコブの格闘による祝福が霊的な相続として子孫に与えられたように、子孫も同様の対立を続けることでこの相続を保持する義務があるという。(Keil, *BCOT*, Accordance, paragraph 455) ブルッグマンも、イスラエルの民のアイデンティティは、神と関わりを持つことだけでなく、神の襲撃の対象とされたことにもあるという（ブルッグマン、前掲書、453 頁）。遠藤は、ヤコブが一人残って格闘したことに注目し、神の取り扱いは個人的なものであると注目する（遠藤、前掲書、194 頁）。この注目は、イスラエルの民が個々人として取り扱われることへの視座となる。

【資料①】ヤコブの生涯における性質の変化

	（a）具体的事象に見られる性質	（b）想定される無自覚の性質
（1）ヤボクの渡し以前		
①長子の権利をめぐる取引（25:29-34）	天幕生活を好む穏やかな性格。 兄の窮状を利用した取引。	ずる賢さ。次子として抵抗。長子の権利への執着。
②長子の祝福の獲得（27 章）	罪悪感、のろいへの恐れ。押しのけ、奪い取る者。	祝福への貪欲さ、執着。妬みと劣等感。父、兄、神への不敬と欺瞞。
③ベテルでの夢（28:11-22）	神の臨在と祝福、守りの約束。応答としてのヤコブの誓願。	孤独な旅への恐れ。神への不信。目に見える守り・物質的満たしの要求。
④ハラン到着（29:1-14）	ラバンとの出会いへの期待と感動。	孤独と不安の旅からの解放と安心。ラバンを唯一の頼みとする。自分の力でラケルに好意を示す。
⑤ハランでの結婚生活（29:15-30:24）	ラバンにだまされ、レアとラケルのために 14 年間仕える。	だまされたことへの怒り。しかし自分の愛する者のために、忍耐と誠実をもって仕える。妻たちの争い、家庭の緊張関係における無力感。
⑥ラバンからの逃亡、和解（30:25-31:55）	ラバンに何度もだまされたことを責める。自分の誠実な働き、神が自分の味方であること、正当な理由で出て行ったことを主張。	自分もまたラバンを欺く。ラバンの下で自らの財産を増やし、ラバンの下から妻や財産とともにひそかに逃げ出そうとする。
⑦エサウへの恐れ（32:1-23）	エサウを恐れ、神に祈り、贈り物を用意する。復讐を逃れる手立てを尽くす。	率直で必死な祈り。へりくだり。神の約束にすがる。それでもなお恐怖に支配される。

（2）ヤボクの渡しの出来事（32:24-32）	祝福を執拗に求めると同時に、人を欺いてまでも自分の祝福を求めてきた古い性質を認める。神と顔を合わせたのに救われる。	これまでの戦いは、神との戦い。その目的は、ヤコブの古い性質が砕かれ、神からの霊的な祝福を得ること。その戦いに勝利したことで、ヤコブの古い性質は砕かれ、神に受け入れられる霊的な救いを得る。
（3）ヤボクの渡し以後		
①エサウとの和解（33:1-15）	堂々と先頭に立ち、へりくだって、兄の前に出る。兄に受け入れられた喜び。贈り物をしきりに勧める。	恐れ、悔い改めや言い訳、善悪を論じる言葉はない。純粋な喜び。贈り物は、兄の怒りをなだめるためではない。もはや祝福を奪う者ではなく、神に祝福された者として、喜んで与える者へと変化。
②エサウとの別れ、旅路（33:16-20）	エサウへの言葉に反して、セイルには行かずシェケムへ向かう。	約束通りではないが、恐れはない。
③ディナ凌辱事件	息子たちと異なり、沈黙。	感情の露呈、善悪を論じること、自ら行動を起こすことはない。
④ベテルへの帰還（35:1-15）	神の命令通りに移動。一族から偶像礼拝を断つ。神からの祝福。	神の命令を速やかに実行に移す。異邦人への恐れはない。主を礼拝する備えを実行。
⑤ラケルの死（35:16-20）	ラケルをエフラテに葬る。	嘆きの表現はない。
⑥ルベンの不当な行為（35:21-22）	報告を聞く。	ルベンに対する言動は記されていない。
⑦父イサクの死（35:27-29）	兄と葬る。	嘆きの表現や、兄との関係は記されていない。
⑧ヨセフへの態度（37:1-11）	ヨセフへの偏愛。夢を語るヨセフを叱るが、心にとめる。	神の計画を待つ態度。

⑨ヨセフの死の知らせ	激しい嘆き。	率直な感情表現。誰も責めない。
⑩エジプトに息子たちを送る（42-43 章）	ベニヤミンへの偏愛。神のあわれみにかけて、失う覚悟をもって送り出す。	命ほど大切なベニヤミンだが、神のみを頼りとして手放す。
⑪エジプト移住（46 章）	息子たちの知らせ、神の約束を聞く。ヨセフと喜びの再会。	神の約束により、エジプト移住がみこころであると知り、安心して向かう。
⑫ファラオとの対面（47:1-10）	ファラオを祝福。自らの人生は多くのわざわいがあったことを告白。	地上の権力者に恐れなく、神の祝福を祈る、ぶれない信仰者。自らを飾らない素直さ。
⑬晩年・死（47:27-49:33）	息子たちを祝福。カナンの地への埋葬を希望。	最後の希望は、神の約束が成ること。

【資料②】名前の使い分けの分析

		「ヤコブ」	「イスラエル」
族長、歴史的個人		33:17, 18; 35:1-15, 27 37:1, 2; 46:5-27; 47:7-10, 28	
感情表現		ヨセフを失った悲しみ（37:34） 生涯のわずかさ、苦難の告白（47:9） ヨセフのことを聞き、茫然としていたが、元気づく（45:27）	ヨセフに会いに行く決断をする（45:28）
家族関係	弟	エサウとの関わり（33:1-15; 36:6）	祝福への貪欲さ、執着。妬みと劣等感。父、兄、神への不敬と欺瞞。
	息子	神の臨在と祝福、守りの約束。応答としてのヤコブの誓願。	孤独な旅への恐れ。神への不信。目に見える守り・物質的満たしの要求。
	妻	ラバンとの出会いへの期待と感動。	孤独と不安の旅からの解放と安心。ラバンを唯一の頼みとする。自分の力でラケルに好意を示す。

家族関係	父	ディナ凌辱事件における父（34:1-30） 12 人の父（35:22） カナンの地にとどまる父（42:26, 35; 45:25, 27） 息子たちを祝福のために呼び寄せる（49:1） 死を前に、埋葬を命じる（49:29-33）	ルベンの不当な行為を聞く（35:22） ユダのとりなしを経て、ベニヤミンをエジプトに送る父（42:6, 8, 11）
	ヨセフ	失った悲しみ（37:34） ヨセフ側の感情移入表現（48:2, 3, 12）	偏愛、ヨセフと実際的関わりを持つ場面（37:3, 13;46:29, 30; 47:29-31; 48:2,21）
	ベニヤミン	偏愛、カナンの地にとどめる（42:4; 36,38）	ベニヤミンをエジプトに送る父（42:6, 8, 11）
	子らの名称	息子たち（おもにシメオン・レビ）、ディナ「ヤコブの息子たち／娘」（34:1-27） 祝福を与えられる「ヤコブの子どもたち」（49:1） 父を埋葬するヤコブの息子たち（50:12）	エジプトに向かう息子たち（42:5; 45:21; 46:5） エジプトに父を連れて来ようとする息子たち（45:21;46:5）
	一族	エジプトに旅立つ一族の系図にて（46:5-25） のちの民（49:7, 24）	民（36:31; 49:7, 16, 24, 28;50:25） エジプトに来た一族（46:8; 47:27）
祝福・約束	神から与えられる時	ベテルにて。聖書記者＋神の呼びかけ「あなたの名はヤコブ。しかし…もうヤコブとは呼ばれない」（35:9-15） エジプトへの道中、神からの直接の呼びかけ（46:2）	ベテルにて、神の呼びかけ。「『イスラエルが、あなたの名となる』神は彼の名をイスラエルと呼ばれた」（35:10） エジプトへの道中。聖書記者による（46:2）
	他者に与える時	ファラオへの祝福（47:7, 10） 息子たちを呼び寄せる父（49:1）	マナセとエフライムへの祝福（48章） 12 人の息子たちへの祝福（49:2）
	祝福される息子たち	「ヤコブの子」（49:1,2） アブラハム、イサク、ヤコブへの約束の地を継承する（50:24）	マナセとエフライムにより、他者を祝福する民イスラエル（48:20）

土地	カナンの地	スコテ、シェケムへの到着(33:17,18) とどまっている状態（42:1, 29, 36, 38; 45:25） ベニヤミンをとどめる（42:4, 36, 38）	シェケムに築いた祭壇の名前(33:20)
	エジプト	エジプトへの道案内のためユダを遣わす 46:28) エジプトの地で 17 年生きた(47:28)	ベニヤミンを送り出すことを決断(43:6-14) 自らが向かうことを決断(45:28;46:1,2) エジプトに向かう息子たち（42:5; 45:21; 46:5)、一族（46:8; 47:27）
性質		へりくだり、堂々と向き合う、物質的祝福に執着しない（33 章） 善悪を論じない、沈黙、控えめ(33,34 章) 約束と祝福の継承者（35:1-15） 神の導きに従い、神を礼拝する(33:17,18)	エサウとの和解を経て、勝利のしるし、礼拝、記念（33:20） 異邦人との関わりや姦通について、神の民としてのあり方を示唆する（34:7; 35:22）